

『ちょっと寄り道しませんか vol.3』

展覧会ステートメント

若いうちに有名にならなければならない、という強迫観念を持った若手作家や美大生は、今の時代、決して少なくはないだろう。SNS 上で大々的に行われる作家のセルフプロデュース、キャッチーなイメージの量産を求めるアートバブルの潮流、YouTuber 的な思考回路というべきか、無意識のうちに、いつか描ける最高のタブローではなく、目の前のバズりや完売の方が優先されてしまっているように思う。

セザンヌの水彩画、マティスの立体、ピカソの皿絵など、大きな偉業を成し遂げた大作家達が人生の道半ばで生み出した多種多様な創作物に目をやれば、ドローイングや習作などの思考実験が制作にとっていかに重要なのかは一目瞭然なわけだが、SNS を中心とした数々のメディアを通して「露出せよ」と迫り来る現代文明の声に晒されて、多くのアーティストは流動的に行われるべきリサーチや素材研究をおざなりにし、キャッチーで流用しやすい固定的なイメージを作ることばかり躍起するようになってしまったように思う。

最近、方々で「アートバブルが弾けた」なんて話を聞く。不安な顔をしながらも、どうしていいか分からずに頭を抱えるギャラリストや若手作家を、アートフェアの喫煙所などでチラホラ見るようになった。リーマンショックによってアートバブルが弾けた 00 年代終期の話をよく 10~20 くらい歳上のアーティスト達から聞いていたが、まさにこんな風景だったのだろうかと恐ろしくなる。

まあ、時代の潮流に合わせて作られた型が、状況が一転した途端に上手くハマらなくなるということは、政治からスポーツから演芸まで、どのジャンルでも散見されるような話ではあるし、自分は前回のアートバブルが弾けた直後に美大に入学した世代で、浮いた話等が一切ない空気の方がベースとして染み付いているし、むしろこの 5~6 年の飛ぶように絵が売れる状況の方が異常な気はしていた。なので、バブルが弾けた！と言われたところで、とうとうきたか、と軽く落胆するくらいで済むわけだが、自分よりも少し下の世代の作家や、ここ数年でギャラリーを立ち上げたギャラリストからしたら、活動の指針が根底から揺らぐような衝撃があるのかもしれない。

15 年前のバブル期の雰囲気になり、当時の美術雑誌のバックナンバーを何冊か探ったことがある。そこに載っていたアーティストやギャラリーを見て、当時の流行り的なもの(会田誠や山口晃の影響を感じさせる、今よりも物語的、あるいは写実的なもの)の片鱗に触れた。たしかに、こういう絵はたくさんあったかと、美大の卒制を東京まで出て、そこで感じたワクワク感を美術室に持ち帰り、まるで大喜利をするかのように特殊な設定やモチーフをクロッキー帳に書き溜めていた高校生時代のことを思い出して、暖かい気持ちになった。そして、そのような絵を見る機会が今ではもうほとんどなくなっているという、なんとも言えない現実も同時に突きつけられた。

別に美術家として名前を残すことが表現の全てではないし、今も彼ら彼女らは何処かで絵を描いてるだろうし、美術に携る仕事をしている可能性だって大いにある。(そうあるべき、そうであってほしい、という話でもなく)

ただ、自己模倣や大量生産を強いる昨今のアートバブルの雰囲気と、当時のことを(想像の範囲で)照らし合わせると、商業的な構造に飲み込まれてしまった思考実験的な制作行為や、あったはずの表現の可能性のことなどを考えてしまい、どうしても簡単には飲み込めない思いが湧き上がってしまう。

実感の乏しい過去に対して思いを馳せるのも、昨今のバブルに全力で乗っている作家達の未来を案じるのも、全て自分のエゴでしかないのだが、予備校講師時代、己の欲望に素直に向き合い、苦悩し、試行錯誤を繰り返して、目を輝かせながら絵を描く生徒達を見ていた身としては、若者が商業の原理や社会通念に晒されて、自由に絵を描けなくなってしまう姿を見ると、声を出さずにはいられないのだ。

好きなように絵を描き、もっとこうしたい！という自分の欲望に触れ、それをクリアするために画材を買いに行ったり、調べものをする時間は[作家として]とかいう話の前に、自分の視点(人生とも言える)をより豊かにするのに必要な素晴らしい時間だ。

誰にでもあるはずの個性と、時間をかけて自己と向き合う自由は、他の何者にも侵害される道理はない。

アーティストが時代の潮流に流されることなく、思考実験を行う時間を確保し、発表する場を設けていくことを目的に、2 年前の夏に『ちょっと寄り道しませんか?』は始まった。

まだバブルが弾ける予兆すらなかったが、自分はその手の話を先輩アーティストや老舗のギャラリストからちよくちよく聞いていたので、何も考えずに目の前の大波に乗るのはなんとなく危険な気はしていた。

別に確信を持っていたわけではないし、普通にバブル特有の煌びやかな展覧会にも乗れる範囲で乗ってはいたが、自己の表現の持続性や流動性を長い目で捉えようとした時に、あまりにも都合がよく、保証のない旨い話を全面的に信用するわけにはいかなかった。

自分達の制作のリズムを守るために、ある種の自衛として、2022 年に本企画は始まった。

その年に第一回、その翌年に第二回、知り合いがやってるカレー屋のちょっとした空きスペースで、まるで忘年会の予定を立てるかのような軽いノリで本企画は行われた。

あまり気負わずに、サークル活動的な緩いテンションでダラダラと続けられるといいな〜、と呑気に企画・運営を続けていたが、今年に入ってからバブルが弾けたという話を方々で聞くようになり、いよいよ 15 年前のアートバブルの再演的な空気を肌で感じるようになり、これまで以上に本企画のイズムを大々的に主張していく必要があるのではないかと思い、ときめき絵画道メンバー(谷口洸、平田守)に相談し、作家数的にもスペース的にも規模を拡張して、第三回となる本展覧会を行う運びとなった。

これは何かと忙しい時代の流れの中で、アーティストが独自のリズムを以って制作を行えるようにするために、美術史に名を残すようなアーティスト達の動きを参照しながら行われる、運動的な展覧会である。

運動なんて言うと仰々しく聞こえてしまうかもしれないが、本展覧会のコンセプトやアティチュードに特筆すべき革新性などはない。美術館に足を運び、習作を鑑賞し、感動する素養というのは既に多くの鑑賞者に備わっているはずだ。

ただ、作品の歴史的価値が認められていない現存の作家である我々に、その手の創作物をオーディエンスに見せるような機会はなかなか与えられておらず、それなのにタブローを見せる機会だけは延々と与えられるものだから、みんな知らず知らずのうちに制作リズムを崩してしまっているのではないか、という話である。

SNS の登場によって作家活動が加速していること自体を批判したいわけではないし、本来アーティストは〜べきだ、というような原理主義的な主張をしたいわけでもないが、文明の進歩に合わせて人間の身体が都合よく進化するなんてことは絶対に起こり得ない(猿からヒトに進化するまでにかかった時間は 700 万年)のだから、人間が目の前の物事を観察し、あーでもないこーでもないと思いを右往左往させ、自らの手でゆっくりと形にしていくという、先人達が示した手本は決して軽視していいものではない。

人が空を飛ぶまでに、何枚もの設計図をグシャグシャに丸めたように、0 から 1 を生み出すためにはものすごい量の実験が必要なのだ。

おそらく今、境界は 15 年前のアートバブルの時と同じ轍を踏もうとしている。

まあ、そうなったらそうなったで、これまで通りアトリエで自由気ままに絵を描き続けるだけなので、制作の本質的には何の問題もないのだが、せつかく増えたオーディエンスをみすみすと取りこぼし、萎んでいく市場を冷笑気味にただ眺めるというのは、アートを愛する者の発想としては少し乏しい気もする。

思考実験的な部分からタブローまで、作家の色々な側面を見せて、美術家を生物として楽しんでもらい、その道程で生まれる創作物達に市場価値を付与することができたら、新しい形の作家活動やギャラリー経営の可能性が出てくるのではないかと思う。

本展覧会は、作品の目線の高さを合わせたり、作品間の距離を十分にとるような、いわゆる普通の展覧会の形式はとらず、現代を生きる作家達の手遊び的な仕草から真剣な手つきまで、様々な表情が無造作に散らばって見えるような空間(アトリエ的とも言える)の展開を目指す。

自分の将来に悩む美大生から、普段は絵を描かないような人々まで、たくさんのオーディエンスの純朴な絵心を刺激できるように、誠心誠意、好き勝手に表現していこうと思う。

この運動が徐々に伝わり、堂々と寄り道をできるアーティストが増え、数十年後のアートシーンが今の何倍も盛り上がっていったらいいな、と思う。

現在のために見つめる過去と、未来のために見つめる現在、我々の物語はまだ序章である。

最後に、このような機会を与えてくださり、作家の都合を優先するような様々なワガママを聞いてくださった、GALLERY10 [TOH] の大庭さんに心から感謝したい。

作品を作るアーティストの方が何かと注目されがちだが、作品を見せる場を作るキュレーターやギャラリストがいないと、そもそも作品を見ることすらできないという事実を、鑑賞者の方々には絶対に忘れないでいただきたい。

大庭さん、本当にありがとうございます！また美味しい飯屋を教えてください！

2024 年 11 月 8 日 多田恋一郎/ときめき絵画道